



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	CoSTEP20年の私的振り返り : 研究との接点を通して
Author(s)	松王, 政浩
Citation	科学技術コミュニケーション, 37, 77-78
Issue Date	2025-08
DOI	https://doi.org/10.14943/114628
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95906
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJSC_37_09_matsuo.pdf



CoSTEP 20 年の私的振り返り ～研究との接点を通して～

松王 政浩¹

Looking Back on 20 years with CoSTEP: Through the Contact with My Research

MATSUO Masahiro¹

キーワード：確率カフェ，ベイズマップ，想像力，科学哲学

Keywords: Café on Probability, Bayes Map, Imagination, Philosophy of Science

CoSTEP が誕生した半年後に、私は北大に赴任した。以来 20 年間、CoSTEP との付き合いが続いている。この間に、CoSTEP の部門長および CoSTEP を含む OEC のセンター長を務める一方、講義を担当したり、演習やカフェの企画を一緒に行ったりということも多少してきた。CoSTEP の表も裏も知っているとはまでは言えないが、人の入れ替わりがある中で、「20 年通して」CoSTEP を見てきた人間は実はそれほどいないはずなので、ある意味、自分は「生き証人」なのかもしれない。

印象深いできごとは数々あるが、自分の研究（科学哲学）と関わる部分で CoSTEP と一緒に活動した（協力してもらった）ことは、やはりひととき強く印象に残っている。

オーストラリアの科学哲学者アラン・ハイエクさんを語り手とする「確率カフェ」は、夜の 7 時開演、アルコール片手という「大人」向けのカフェだった（2017 年 9 月 12 日開催）。「極めて低い確率の事象をどう捉えるか」というテーマは、理論的には難しい面があるものの、3.11 を経験した私たちには他人事と言えないテーマで、アランの熱い語りにみな聞き入っていた。質疑応答も、ときに笑いに包まれながら、ほどよい緊張感のもと本質に迫るもので、会場の薄暗い照明と、アルコールの軽い酔いも手伝って、参加者は徐々に哲学的深淵の入り口まで引き入れられていたように思う。カフェのタイトル「ありえないはありえない」というのは、確か私の発案だったと思うが、感心したのは受講生の岡碧幸さんがデザイン実習で作ってくれたポスターである。ブラックスワンをモチーフにした、上下白黒を反転させたデザインで、この「ありえないはありえない」というテーマが実に巧みに表現されていた。いまでもこのポスターは大事に飾っている。アランもこれをいたく気に入っていた。CoSTEP の場の設定の素晴らしさに加え、デザイン実習によるバックアップという、関係プレーの素晴らしさにも感銘を受けたイベントであった。

演習の企画、実施でも CoSTEP にはお世話になった。統計学認識論をテーマに科研費をもらった際、「ベイズと統計：推論・認識・解析」というタイトルの演習を二回にわたって CoSTEP の場で実施させてもらった（2019 年 1 月 12 日、23 日）。統計学の基礎を学んだ人でも比較的なじみの薄い

ベイズ推論、ベイズ統計について、いかに根本的な考え方を伝えるかが演習のテーマである。科研メンバーがまず連続講義を行う。並の教育であれば、そこで適当なテーマを与えてグループディスカッションに持ち込んで終わりであろう。しかし、それではなかなかベイズの本質までたどり着かない。この演習のキーパーソンは池田貴子さんだった。池田さんが「視覚化」に関するレクチャーを行い、ベイズ主義およびその周辺概念、概念間の関係を視覚化して「ベイズマップ」を作ることが、各グループの課題として課された。口先で議論するだけでなく、マップという成果物が求められるので、種々の作業が発生し、作業の中で自然とアイデアが生まれ議論が生まれる。視覚化という目標が入ることで、知的生産の様子が大きく変わることが手に取るように分かった。こうした発想は科学哲学にはない。しかし、科学哲学にもこの手法が有効であることは間違いない。CoSTEPを研究実践の場とさせてもらうことで、科学哲学と科学技術コミュニケーションの共同の可能性に気づかせてもらったイベントであった（同じ科研メンバーで、当時部門長の川本思心さんも、この可能性に気づかせてくれた一人である）。

そのほか、研究がらみでは、科研費で招へいたLSEの科学哲学者ローマン・フリッグさんとアーティストの平川紀道さんとの対談「アートと科学哲学からの、想像力をめぐる対話」（2023年2月24日）も印象に残る企画である（これが実現したのは朴炫貞さんや奥本素子さんらのおかげである）。近年、科学とアートの距離が近づきつつあるが、科学哲学とアートも接近しつつある。鍵は「想像力」にある。これが科学、アートの共通の源泉だとすれば、想像力への切り込みが科学技術コミュニケーションや科学哲学にとって重要な意味をもつことになる。二人の対談はそれを十分予想させる、たいへん刺激に満ちたものだった。科学技術コミュニケーションとの共同可能性に加え、科学哲学の課題も再認識させてくれるイベントであった。

こうして振り返ってみて、自分の研究との関係という限られた接点でさえ、CoSTEPあるいは科学技術コミュニケーションが、いかに懐の広い、さまざまな展開可能性をもつ組織、分野であるかということを改めて実感させられる。冒頭に自分は「生き証人」であるなどと言ったが、気づけば定年まで数年となった。残る時間はわずかだが、証人でいられる間はしっかりCoSTEPの成り行きを見守りたいと思う。



図1 第128回サイエンス・カフェ札幌「アートと科学哲学からの、想像力をめぐる対話」の場面